

魔法修行者

幸田露伴

青空文庫

魔法。

魔法とは、まあ何という笑^{わら}わしい言葉であろう。

しかし如何^{いか}なる国の何時^{いつ}の代にも、魔法というようなことは人の心の中に存在した。そしてあるいは今でも存在しているかも知れない。

埃及^{エジプト}、印度^{いんど}、支那^{しな}、阿剌比亜^{アラビア}、波斯^{ペルシヤ}、皆魔法の問屋^{といや}たる国だ。

真面目に魔法を取扱^{いか}つて見たらば如何^{いか}であろう。それは人類学で取扱^{いか}うべき箇条^{かど}が多かろう。また宗教の一部分として取扱^{いか}うべき廉^{かど}も多いであろう。伝説研究^{うち}の中に入れて取扱^{いか}うべきものも多いだろう。文芸製作として、心理現象として、その他種^{うち}の意味からして取扱^{いか}うべきことも多いだろう。化学、天文学、医学、数学なども、その歴史の初頭においては魔法と関係を有しているといつて宜^{よろ}しからう。

従つて魔法を分類したならば、哲学くさい幽玄高遠なものから、手づまのような卑小^せ浅^せ陋^{なんろう}なものまで、何^{なん}程^{ほど}の種^{しゅ}類^{るい}と段階^{たんだい}とがあるか知れない。

で、世界の魔法について語^{かた}つたら、一^{ひと}月^{げつ}や二^{ふた}月^{げつ}で尽^つきるわけのものではない。例えば魔法の中で最も小さな一部の厭勝^{ましな}の術^{じゆつ}の中の、そのまた小さな一部のマジックスクエア

の如きは、まことに言うに足らぬものである。それでさえ支那でも他の邦くにでも、それに病災はらを禳はらい除く力があると信じたり、あるいはまたこれを演繹して未来を知ることを得るとしたりしている。洛書らくしよというものは最も簡単なマジックスクエアである。それが聖典たる易えきに關かしてゐる。九宮方位きゆうきゆうほういの談だん、八門遁甲はちもんとうこうの説せつ、三命さんめいの占うらない、九星きゆうせいの卜ぼく、皆それに續ついてゐる。それだけの談はなしさえもなかなか尽きるものではない。一より九に至るの数を九格正方面きゆうかくせいほうないに一つずつ置いて、縦線じゆうせん、横線おうせん、対角線、どう数えても十五になる。一より十六を正方面内に置いて縦線、横線、対角線、各隅かくぐう、随処四方角、皆三十四になる。二十五格内に同様に一より二十五までを置いて、六十五になる。三十六格内に三十六までの数を置いて、百十一になる。それ以上いくらでも出来ることである。が、その法を知らないで列なうべたのでは、一日かかつてもし多い根数こんすうになれば出来ない。古代の人が驚異したのに無理はないが、今日はバツエツト方法、ポイグナード方法、その他の方法を知れば、随分大きな魔方陣でも列べ得ること容易である。しかし魔方陣のことを談かたるだけでも、支那印度の古いにしえより、その歴史その影響、今日の数学的解釈及び方法までを談かたれば、一卷の書を成しても足らぬであろう。極《ごくごく》小さな部分の中の小部分でもその通りだ。そういう訳だから、魔法の談はなしなどといつても際限のないことである。

我^わ邦^{がくに}での魔法の歴史を一瞥^{ひとく}して見よう。先ず上古において厭勝^{ましな}の術があった。この「まじなう」という「まじ」という語は、世界において分布区域^{はなは}の甚だ広い語で、我国においてもラテンやゼンドと連なっているのがおもしろい。禁厭^{きんえん}をまじないやむると訓^よんでいるのは古いことだ。神代^{しんだい}から存したのである。しかし神代のは、悪いこと兇^{あや}なることを押し禁^とむるのであった。奈良朝になると、髪^{かみ}の毛^なを穢^{きたな}い佐保川^{さほがわ}の鬻^{どくろ}體^{たい}に入れて、「まじもの」せる不逞^{ふてい}の者などあった。これは咒詛^{じゆそ}調伏^{ちようぶく}で、厭魅^{えんみ}である、悪い意味のものだ。当時既にそういう方術があつたらしく、そういうことをする者もあつたらしい。

神おろし、神がかりの類は、これもけだし上古からあつたらう。人皇^{にんのう}十五、六代の頃に明らかに見える。が、紀記ともに其^{そこ}処^こは仮託が多いと思われる。かみなびの神より板^{いた}にする杉のおもひも過^{すぎ}ず恋のしげきに、という万葉卷九の歌によつても知られるが、後にも「琴の板」というものが杉で造られてあつて、神教^{しんきやう}をこれによりて受けるべくしたものである。これらは魔法というべきではなく、神教^{しんきやう}を精誠^{せいせい}によつて仰ぐのであるから、魔法としては論ぜざるべきことである。仏教^{ぶつ}巫徒^{ふと}の「よいまし」「よいき」の事と少し似てはいるであらう。

仏教が渡来するに及んで咒詛^{じゆそ}の事など起つたらうが、仏教ぎらいの守屋^{もりや}も「さま／＼

のまじわざものをしき」と水鏡みづかがみにはあるから、相手が外国流おのれまもで己を衛り人を攻むれば、こちらも自国流の咒詛をしたのかも知れぬ。しかし水鏡は信憑すべき書ではない。

役えんの小角しょうかくが出るに及んで、大分魔法使いらしい魔法使いが出て来たわけになる。葛城つづぎの神を駆使したり、前鬼ぜんき後鬼ごきを従えたり、伊豆の大島から富士へ飛んだり、末には母を鍔てつ鉢ばちへ入れて外国へ行ったなどということであるが、余りあてになろう訳もない。小角は孔雀明王くじやくみょうおうじゆ咒じゆを持してそういうようになったというが、なるほど孔雀明王などのような豪気なものを祈つて修法成就したら神変奇特も出来る訳か知らぬけれど、小角の時はまだ孔雀明王についての何ものが唐とうで出ていなかったように思われる。ちよつと調べてもraithたい。

白山はくさんの泰澄たいちようや臥行者がぎようしやも立派な魔法使らしい。海上の船から山中いおりの庵こめづとへ米苞げつけが連続して空中を飛んで行つてしまつたり、紫宸殿ししいでんを御手製地震おてせいでゆらゆらとさせて月卿げんこうし雲客うんかくを驚かしたりなどしたというのは活動写真映画として実に面白いが、元亨げんこうし釈書などに出て来る景気の好い訳わけは、大衆文芸ではない大衆宗教で、ハハア、面白いと聞いて置くに適している。

久米くめの仙人に至つて、映画もニコニコものを出すに至つた。仙人は建築が上手で、弘こうほ

法大師うたいしなども初はじめは久米様のいた寺で勉強した位である、なかなかの魔法使いだったから、雲ぐらいには乗つたろうが、洗濯女の方が魔法が一段上だったので、負けて落第生となつたなどは、愛嬌よだれと涎したたと一緒に滴るばかりで実に好人物だ。

奈良朝から平安朝、平安朝と来ては実に外美内醜の世であつたから、魔法くさいことこの行われるには最も適した時代であつた。源氏物語は如何にまじないが一般的であつたかを語っており、法力ほうりきが尊いものであるかを語っている。この時代の人 は大概現世祈禱を事とする墮落僧の言を無批判に頂戴し、将門まさかどが乱を起しても護摩ごまを焚たいて祈り伏せるつもりでいた位であるし、感情の絃いとは蜘蛛くもの糸ほどに細くなつていたので、あらゆる妄信にへばりついて、そして虚礼と文飾と淫乱とに辛くも生きていたのである。生いきりよう、靈しりよ、死、靈う、のろい、陰陽師おんようしの術、巫覡ふげきの言、方位、祈祷、物の怪け、転生じやみ、邪魅、因果、怪異、動物の超常力、何でも彼かでも低頭ていとうしてこれを信じ、これを畏れ、あるいはこれに頼り、あるいはこれを利用していたのである。源氏以外の文学及びまた更に下つての今昔こんじゃく、宇治うじ、著聞集ちよもんじゅう等の雑書に就いて窺うかがつたら、如何にこの時代が、魔法ではなくとも少くとも魔法くさいことを信受していたかが知られる。今一いちいち例を挙げていることも出来ないが、大概日本人の妄信はこの時代に醞うんじよう釀じようし出されて近時にまで及んでいるのである。

大體の談は先ずこれまでにして置く。

我国で魔法の類の稱を挙げて見よう。先ず魔法、それから妖術、幻術、げぼう、狐つかい、飯綱の法、茶吉尼の法、忍術、合氣の術、キリシタンバテレンの法、口寄せ、識神をつかう。大概はこれらである。

これらの中、キリシタンの法は、少しは奇異を見せたものかも知らぬが、今からいえば理解の及ばぬことに対する怖畏よりの誇張であつたろう。識神を使ったというのは阿倍晴明きりの談になつている。口寄せ、梓神子は古い我邦の神おろしの術が仏教の輪廻説と混じて変形したものらしい。これは明治まで存し、今でも辺鄙には密に存するかも知れぬが、営業的なものである。但しこれには「げぼう」が連絡している。忍術というのは明治になつては魔法妖術という意味に用いられたが、これは戦乱の世に敵状を知るべく潜入密偵するの術で、少しは印を結び咒を持する真言宗様の事をも用いたにもせよ、兵家の事であるのがその本来である。合氣の術は剣客武芸者等の我が神威を以て敵の意気を摧くので、鍛錬した我が氣の冴を微妙の機によつて敵に徹するのである。正木の氣合の談を考えて、それが如何なるものかを猜することが出来る。魔法の類ではない。妖術幻術というはただ字面の通りである。しかし支那流の妖術幻術、印度流の幻師の法を伝えた痕跡はむ

しろ少い。小角しょうかくや淨藏じようぞうなどの奇蹟は妖術幻術の中には算さんしていないで、神通道力というように取扱ひ来っている。小角は道士羽客どうしうかくの流にも大日本史などでは扱われているが、小角の事はすべて小角死して二百年ばかりになって聖宝しようほうが出た頃からいろいろ取と離りはやされたもので、その間に二百年の空隙があるから、聖宝の偉大なことやその道としたところはおよそ認められるが、小角が如何なるものであつたかは伝説化したるその人において認めるほかはないのである。聖宝は密教の人である。小角は道家ではない。勿論道家と仏家は互に相奪っているから、支那において既に混淆しており、従つて日本においても修験道の所為しよゐなど道家くさいこともあり、仏家が「九字」をきるなど、道家の咒じゆを用いたり、符籙ふうろくの類を用いたりしている。神仏混淆は日本で起り、道仏混淆は支那で起り、仏法婆羅門ばらもん混淆は印度で起っている。何も不思議はない。ただここでは我邦でいう所の妖術幻術は別に支那印度などから伝えた一系統があるのではなくて、字面だけの事だといふのである。

さて「げほう」というのになる。これは眩法げんぽうか、幻法か、外法げぽうか、不明であるが、何にせよ「げほう」という語は中古以来行われて、今に存している。増鏡ますかがみ卷五に、太政大臣藤原公相ふじわらきみすけの頭が大きくて大でこで、げほう好みだったので、「げはふとかやまつ

るにかゝる生頭なまこうべのいることにて、某それがしのひじりとかや、東山のほとりなりける人取りてけるとて、後に沙汰のちがましく聞えき」という事があつて、まだしやれ頭にならない生頭を取られたというのである。して見ればこの人の薨去こうきよは文永四年で北条時宗ときむね執権の頃であるから、その時分「げほう」と称する者があつて、げほうといえは直に世人ただちがどういものだと解することが出来るほど一般に知られていたのである。内典ないてん外典げてんというが如く、げほうは外法げほうで、外道げどうというが如く仏法でない法の義であらうか。何にせよ大変なことで、外法は魔法たること分明だ。その後になつても外法頭げほうあたまという語はあつて、福祿寿ふくろくじゆのよな頭を、今でも多分京阪地方では外法頭というだろう、東京にも明治頃までは、下駄の形の称に外法というのがあつた。竹斎ちくさいだか何だったか徳川初期の草子そうしにも外法あたまといふはあり、「外法の下り坂」という奇抜な諺ことわざもあるが、福祿寿のような頭では下り坂は妙に早かろう。

流布本太平記卷三十六、細川相模守清氏さがみのかみきようち叛逆の事を記した段に、「外法成就の志しいつ一上しょうにん人鎌倉のぼより上つて」云とある。神田本同書には、「此志一上人このはもとより邪天道法成就の人なる上、近頃鎌倉にて諸人奇特きとくの思をなし、帰依きえ浅からざる上、畠山はたけやま入道うしどう諸事深く信仰たのみ頼入うしどうりて、関東にても不思議ども現じける人なり」とある。清氏はこ

の志一を頼んで、だぎにてん 祇尼天に足利義詮を祈殺いのりころそうとの願状がんじょうを奉ったのである。さすれば「邪天道法成就」というのは、祇尼天を祈る道法成就ということで、志一という僧はその法で「ふしぎども現じける」ものである。これで当時外法と呼んだものは祇尼天法であることが知れる。けだし外法は平安朝頃から出て来たらしい。

狐つかいは同じく《ところどころ》にあり、狐媚狐惑こびこわくの談だんは雑書小説に煩らわしいほど見える。印度でも狐は仏典に多く見え、野干ヤツカル（狐とは少し異ちがおう）は何時いつも狡智あるものとなっている。《ふくふく》しいものではないのである。祇尼はまた阿修羅波子アシユラバス

とも呼ばれて、その義は「飲血者」である。狐つかいの狐は人に禍わざわいや死を与える者とされている。して見れば 祇尼の狐で、お稻荷様の狐ではないはずである。大江匡房が記

している狐の大饗だいきやうの事は堀河天皇の康和三年である。牛骨などを饗きやうするのであったか

ら、その頃から 祇尼の狐ということが人の思想にあったのではないかと思われるが、こ

れは真の想像である。明らかに狐を使った者は、応永二十七年九月足利將軍義持よしもちの医師

の高天こうてんという者父子三人、將軍に狐を付けたこと露顕して、同十月讃岐国さぬきのくにに流された

のが、年代記にまで出ている。やはり 祇尼法であつたろうことは思遣おもいやられるが、他の

者に祈られて狐が二匹室町御所から飛出とびだしたなどというところを見ると、將軍長病で治ら

なかつた余りに、人に狐を憑けるなどという事が一般に信ぜられていたに乗じて、他の者から仕組まれて被せられた冤罪だつたかも知れない。が、何にしろ足利時代には一般にそういう魔法外法邪道の存することが認められていたに疑ない。世が余りに狐を大したものに思うところから、釣狐のような面白い狂言が出るに至つた、とこういうように観察すると、釣狐も甚だ面白い。

飯綱の法というといよいよ魔法の本統大系のように人に思われている。飯綱は元来

山の名で、信州の北部、長野の北方、戸隠山につづいてゐる相当の高山である。この山

には古代の微生物の残骸が土のようになって、戸隠山へ寄つた方に存する処がある。天狗

の麦飯だの、餓鬼の麦飯だのといつて、この山のみではない諸処にある。浅間山観測所

附近にもある。北海道にもある、支那にもあるから太平広記に出てゐる。これは元来が

動物質だから食えるものである。で、飯綱は仮名ちがいの擬字で、これがあるからの飯

沙山である。そういうちよつと異なるものがあつたから、古く保食神即ち稻荷なども勧

請してあつたかも知れぬ。ところが茶吉尼法は著聞集に、知定院殿が大権坊という

奇験の僧によりて修したところ、夢中に狐の生尾を得たり、などとある通り、古くから

行われていたし、稻荷と茶吉尼は狐によつて混雜してしまつていた。文徳実録に見え

る席田郡の妖巫の、その靈軫行して心を噉い、一種滋蔓して、民毒害を被る、とい
 うのも噉心の二字が、祇尼法の如く思えるところから考えると、なかなか古いもので、今
 昔物語に外術とあるものもやはり外法と同じく、祇尼法らしいから、随分と索隠行
 怪の徒には軫軫伝受されていたのだらうと思われる。伝説に依ると、水内郡荻原
 に、伊藤豊前守忠繩というものがあつて、後堀河天皇の天福元年（四条天皇の元年で、
 北条泰時執権の時）にこの山へ上つて穀食を絶ち、何の神か不明だがその神意を受けて
 祈願を凝らしたとある。穀食を絶つても食える土があつたから辛防出来たろう。それか
 ら遂に大自在力を得て、凡そ二百年余も生きた後、応永七年足利義持の時に死したとい
 ことだ。これが飯綱の法のはじまりで、それからその子盛繩も同じく法を得て奇驗を現
 わし、飯綱の千日家というものは、この父子より成立ち、飯綱権現の別当ともいうべき
 ものになつたのであり、徳川初期には百石の御朱印を受けていたものである。

今は飯綱神社で、式内の水内郡の皇足穂命神社である。昔は飯綱大明神、または
 飯綱権現と称し、先ず密教修験的の靈区であつた。他からは多くは祇尼天を祭るとせら
 れたが、山では勝軍地藏を本宮とするとしていた。勝軍地藏は日本製の地藏で、身に
 甲冑を着け、軍馬に跨つて、そして錫杖と宝珠とを持ち、後光輪を戴いているも

のである。如何にも日本武士的、鎌倉もしくは足利期的の仏であるが、地蔵十輪經に、この菩薩はあるいは阿索洛身アシユラを現わすとあるから、甲かぶとを被り馬に乗って、甘くない顔をしていられても不思議はないのである。山城やましうの愛宕あたご権現も勝軍地蔵を奉じたところで、それにつづいて太郎坊大天狗などという恐ろしい者で名高い。勝軍地蔵はいつでも武運を守り、福德を授けて下さるといふ信仰たいてきの対的である。明智光秀も信長を殺す前には愛宕へ詣まいつて、そして「時は今天あめが下知る五月さつきかな」といふを発句に連歌を奉っている位だ。飯綱山も愛宕山に負けはしない。武田信玄は飯綱山に祈願をさせている。上杉謙信がそれを見て嘲笑あざわらつて、信玄、弓箭ゆみやでは意をば得ぬより権現の力を藉かろうとや、謙信が武勇優れるに似たり、と笑つたというが、どうして信玄は飯綱どころか、禪宗でも、天台宗でも一向宗までも吞吐どんとして、諸国つかいへの使は一向坊主にさせているところなど、また信玄一流の大ききで、飯綱の法を行おこなつたかどうか知らぬが、甲州八代郡末木村慈眼寺に、同寺から高野こうやへ送つた武田家品物の目録書の稿の中に、飯縄本尊ならび并に法次第一冊信玄公御隨身みずいしんとあることが甲斐国志かいこくし巻七十六に見えているから、飯綱の法も行つたか知れぬ。

勝軍地蔵か 祇尼天か、飯綱の本体はいずれでも宜よいが、祇尼は古くからいい伝えてゐること、勝軍地蔵は新らしく出来たもの、だきには胎藏界曼陀羅たいざうかいまんだらの外金剛部院げこんごうぶいんの一

尊であり、勝軍地蔵はただこれ地蔵の一変身である。大日經だいにちきよう卷第二に茶枳尼だきには見えており、儀軌ぎきしんこん真言なども伝来の古いものである。もし密教の大道理からいえば、茶枳尼も大日、他の諸天も大日、玄奥げんおう秘密の意義理趣を談ずる上からは、甲乙の分け隔てはなくなる故にとかくを言うのも愚なことであるが、先ず茶枳尼として置こう。茶枳尼天の形相、真言等をここに記するも益無きことであるし、かつまた自分が飯綱二十法を心得ているわけでもないから、飯綱修法に関することは書かぬが、やはり他の天部てんぶ夜叉部やしやぶ等の修法の如くに、相伝を得て、次第により如法によほうに修するものであろう。東京近くでは武州高雄山たかおさんからも、今は知らぬが以前は茶枳尼の影像を与えたものである。諸国に茶枳尼天を祭ったところは少からずあるが、今その法を修する者はあるまい。まして魔法の邪法のといわれるものであるから、真に修法じゆほうする者は全くあるまいが、修法の事は、その利益功能のある状態や理合りごうを語ろうとしても、全然そういうことを知らぬ人に理解せしむることは先ず不可能であるから、まして批評を交えてなど語れるものではない。管狐くだぎつねという鼠ほどの小さな狐を山より受取つて来て、これを使うなどということは世俗のややもすれば伝えることであるが、自分は知らぬ。天狗も茶枳尼には連なることで、愛宕にも太郎坊があれば、飯綱にも天狗嶽という魔所があり、餓鬼曼陀羅がきまんだらのような茶枳尼曼陀羅には天狗もあり、

また茶吉尼天その物を狐に乗っている天狗だと心得ている人もある。むかし僧正遍照へんじょうは天狗を金網の中へ籠めて焼いて灰にしたというが、我らにはなかなかそのような道力はないから、平生いろいろな天狗に脅おびされて弱っている、俳句天狗や歌天狗、書天狗画天狗じようり浄瑠璃天狗、その上に本物の天狗に出られて叱られてもしたら堪たまらないから筆を擱く。

我邦で魔法といえば先ず飯綱の法、茶吉尼の法ということになるが、それならどんな人が上に説いた人のほかに魔法を修したか。志一や高天は言うに足らない、山伏や坊さんは職分的であるから興味もない。誰かないか。魔法修行のアマチュアは。

ある。先ず第一標本には細川政元まさもとを出そう。

彼の応仁の大乱は人も知る通り細川勝元かつもとと山名宗全やまなそうぜんとが天下を半分ずつに分けて取って争ったから起ったのだが、その勝元の子が即ち政元だ。家柄ではあり、親父の余威はあり、二度も京都管領かんりようになったその政元が魔法修行者だった。政元は生れない前から魔法に縁があつたのだから仕方がない。はじめ勝元は彼あれだけの地位に立っていても、不幸にして子がなかつた。そこでその頃の人だから、神仏に祈願を籠めたのであるが、観音かんのんか何かに祈るといふなら普門品ふもんぼんの誓ちかいによつて好い子を授けられそうなどころを、勝元は妙なところへ願を掛けた。何に掛けたか。武将だから毘沙門びしゃもんとか、八幡はちまんとかへ願えば

まだしも宜いものを、愛宕山大権現へ願った。勝元は宗全とは異って、人あたりの柔らかな、分別も道理はずれをせぬ、感情も細かに、智慧も行届く人であったが、さすがに大乱の片棒をかついだ人だけに、やはり※いとところがあつたと見えて、愛宕山権現に願掛けした。愛宕山は七高山の一として修験の大修行場で、本尊は雷神にせよ素盞鳴尊にせよ破死神にせよ、いずれも暴い神で、この頃は既に勝軍地蔵を本宮とし、奥の院は太郎坊天狗様の拠所であつた。武家の尊崇によつて愛宕は最も盛大な時であつたろうが、こういう訳で生れた政元は、生れぬさきより恐ろしいものと因縁があつたのである。

政元は幼時からこの訳で愛宕を尊崇した。最も愛宕尊崇は一体の世の風であつたろうが、自分の特別因縁で特別尊崇をした。数 《しばしば》社参する中に、修験者らから神怪幻詭の偉い談などを聞かされて、身に浸みたのであろう、長ずるに及んで何不自由なき大名の身でありながら、葷腥を遠ざけて滋味を食わず、身を持する謹厳で、超人間の境界を得たい望に現世の欲樂を取ることを敢てしなかつた。ここは政元も偉かつた。憾むらくは良い師を得なかつたようである。婦人に接しない。これも差支ないことであつた。自由の利く者は誰しも享樂主義になりたがるこの不穩な世に大自由の出来る身を以て、淫欲までを禁遏したのは恐ろしい信仰心の凝固りであつた。そして畏るべき鉄のような

厳冷な態度で修法をはじめた。勿論生やさしい料簡^{がた}方で出来る事ではない。

政元は堅固に厳肅に月日を過した。二十歳、三十歳、四十近くなった。舟岡^{ふなおか}記にその有様を記してある。曰く、「京管領細川右京太夫政元は四十歳の比^{ころ}まで女人禁制にて、魔法飯綱の法愛宕の法を行ひ、さながら出家の如く、山伏の如し、或時は経を読み、陀羅尼^{だらに}をへんしければ、見る人身の毛もよだちける。されば御家^{おいえ}相続の子無くして、御内^{みうち}、外様^{とさま}の面、色^{いろ}諫^{いさ}め申しける。」なるほどこういう状態では、当人は宜^よいが、周囲の者は畏れたろう。その冷い、しやちこぼった顔付が見えるようだ。

で、諸大名ら人の執成^{とりな}しで、將軍義澄^{よしずみ}の叔母の縁づいてゐる太政大臣九条政基^{まさもと}の子を養子に貰^すつて元服させ、將軍が烏帽子親^{えぼしおや}になつて、その名の一字を受けさせ、源九郎澄之^{すみゆき}とならせた。

澄之は出た家も好し、上品の若者だったから、人も好い若君と喜び、丹波^{たんば}の国をこの人に進^{すす}めることにしたので、澄之はそこで入都した。

ところが政元は病氣を時^{とき}したので、この前の病氣の時、政元一家の内《うちうち》の人^{ひと}だけで相談して、阿波^{あわ}の守護細川慈雲院^{じうんいん}の孫、細川讃岐守^{さぬきの}之勝^{かみゆき}の子息が器量^{きりやう}骨柄^{こつへい}も宜しいというので、摂州^{せつしゅう}の守護代薬師寺与一^{やくしじよいち}を使者にして養子にする契約をし

たのであつた。

この養子に契約した者も將軍より一字を貰つて、細川六郎澄元すみもとと名乗つた。つまり澄元の方は内 の者が約束した養子で、澄之の方は立派な人 の口入くちいれで出来た養子であつたのである。これには種 の説があつて、前後が上記と反対しているのもある。

澄元契約に使者に行つた細川の被官の薬師寺与一いちもんぷつうというのは、一文不通の者であつたが、天性正直で、弟の与二よじとともに無双の勇者で、淀よどの城に住し、今までも度 《たびたび》手柄を立てた者なので、細川一家では賞美していた男であつた。澄元のあるところへ、澄之という者が太政大臣家から養子に來られたので、契約の使者になつた薬師寺与一は阿波の細川家へ対して、また澄元に対して困つた立場になつた。そこで根が律義勇猛のみで、心は狭く分別は足らなかつた与一は赫かつとしたのである。この頃主人政元はというと、段魔法に凝り募こつて、種 の不思議を現わし、空中へ飛上つたり空中へ立ったりし、喜怒も常人とは異り、分らぬことなど言う折もあつた。空中へ上のぼるのは西洋の魔法使もする事で、それだけ永い間修業したのだから、その位の事は出来たことと見て置こう。感情が測られず、超常的言語など発するというのは、もともと普通凡庸の世界を出たいというので修業したのでから、修業を積みばそうなるのは当然の道理で、ここが慥たしかに魔法の有難いところ

である。政元からいえば、どうも変だ、少し怪しい、などといった奴は、何時までも雪を白い、烏を黒いと、退屈もせずに同じことを言っている扱 《さてさて》 下らない者どもだ、と見えたに疑ない。が、細川の被官どもは弱っている。そこで与一は赤沢宗益あかさわそうえというものと相談して、この分では仕方がないから、高圧的強請きょうせい的に、阿波の六郎澄元殿を取立てて家督にして終い、政元公を隠居にして魔法三昧でも何でもしてもらおう、と同盟し、与一はその主張を示して淀の城へ籠り、赤沢宗益は兵を率いて伏見竹田口ふしみたけだぐちへ強請的に上って来た。

与一の議に多数が同意するではなかった。澄之に意を寄せている者も多かった。何にしろ与一の仕方が少し突飛とつぴだったから、それ下として上を剋こくする与一を撃てということになった。与一の弟の与二は大将として淀の城を攻めさせられた。剛勇ではあり、多勢ではあり、案内は熟知よ知っていたので、忽に淀の城を攻落せめおとし、与二は兄を一元寺いちげんじで詰腹つめばら切らせてしまった。その功で与二は兄の跡に代って守護代となった。

阿波の六郎澄元は与一の方から何らかの使者を受取ったのであろう、悠然として上洛した。無人では叶わぬところだから、六郎の父の讃岐守は、六郎に三好筑前守之長みよしちくぜんのかみゆきなと高畠たかばたけ与三よぞうの二人を付随つづいたがさせた。二人はいずれも武勇の士であった。

与二は政元の下で先度の功に因りて大に威を振つたが、兄を討ったので世の用いも悪く、三好筑前守はまた六郎の補佐の臣として六郎の権威と利益とのためには与二の思うがままにもさせず振舞うので、与二は面白くなくなつた。

そこで与二は竹田源七、香西又六などというものと相談して、兄と同じような路をあるこうとした。異なっているところは兄は六郎澄元を立てんとし、自分は源九郎澄之を立てんとするだけであつた。とても彼のように魔法修行に凝つて、ただ人ならず振舞いたまうようでは、長くこの世にはおわし果つまじきである、六郎殿に御世を取られては三好に権を張り威を立てらるるばかりである、是非ないことであるから、政元公に生害をすすめ、丹波の源九郎殿を以て管領家を相続させ、我が天下の権を取ろう、と一決した。

永正四年六月二十三日だ。政元はそのような事を被官どもが企てているとも知ろうようはない。今日も例の通り厳冷な顔をして魔法修行の日課を如法に果そうとするほかに何の念もない。しかし戦乱の世である。河内の高屋に叛いているものがあるので、それに対して摂州衆、大和衆、それから前に与一に徒党したが降参したので免してやった赤沢宗益の弟福王寺喜島源左衛門和田源四郎を差向けてある。また丹波の謀叛対治のために赤

沢宗益を指向さしむけてある。それらの者はこの六月の末という暑氣に重い甲冑を着て、矢叫やさけび、太刀音たちおと、陣鐘じんがね、太鼓の修羅しゆらの衢ちまたに汗を流し血を流して、追いつ返しつしているのである。政元はそれらの上に念を馳せるでもない、ただもう行法が楽しいのである。碁を打つ者は五目勝もくった十目勝ったというその時の心持を楽しんで勝とうと思つて打つには相違ないが、彼一石我一石を下くだすその一石一石の間を楽しむ、イヤそのただ一石を下すその一石を下すのが楽しいのである。鷹を放つ者は鶴を獲たり鴻こうを獲たりして喜ぼうと思つて郊外に出るのであるが、実は沼沢しやうたくりんそう林藪おもむの間を徐ろに行くその一步一步が何ともいえず楽しく喜ばしくて、歩に喜びを味わっているのである。何事でも目的を達し意を遂げるのばかりを楽しいと思う中うちは、まだまだ里さとの料簡である、その道の山深く入った人の事ではない。当下とうげに即ち了りようするという境界に至つて、一石を下す裏に一局の興はあり、一步を移すところよろこびに一日の喜は溢れていると思うようになれば、勝つて本より楽しく、負けてまた楽しく、禽とりを獲て本より楽しく、獲ずしてまた楽しいのである。そこで事相じそうの成不成、機縁の熟不熟は別として一切が成熟するのである。政元の魔法は成就したか否か知らず、永い月日を倦うまず怠らずに、今日も如法に本尊を安置し、法壇を嚴飾し、先ず一身あかの垢けがれを去り穢けがれを除かんとして浴室に入った。三業さんごう純淨じゆんじやうは何の修法にも通有の事である。今は言葉をも

発せず、言わんともせず、意を動かしもせず、動かそうともせず、安詳あんしょうに身を清くしていた。この間に日影の移る一寸一寸、一分一分、一厘一厘が、政元に取っては皆好ましい魔境の現前であつたろう歟、業通ぎょうつう自在じざいの世界であつたろうか、それは傍はたからは解らぬが、何にせよ長い長い月日を倦まずに行じていた人だ、倦まぬだけのものを得ていなくては続かぬ訳だつた。

吉尼天は魔だ、仏ぶつだ、魔でない、仏ほとけでない。吉尼天だ。人心を瞰かん尽じんするものだ。心垢しんくを瞰尽するものだ。政元はどういう修法をしたか、どういう境地にいたか、更に分らぬ。人はただその魔法を修したるを知るのみであつた。

政元は行水ぎょうすいを使った。あるべきはずの浴衣よくいはなかつた。小姓の波伯部ははかべは浴衣を取りに行った。月もない二十三日の夕風は颯さつと起つた。右筆ゆうひつの戸倉二郎というものは突つと跳り込んだ。波伯部が帰つて来た時、戸倉は血刀ちがたなを揮ふるつて切付けた。身をかわして薄手たかだけで遁のがれた。

翌日たまたは戦たたかだつた。波伯部は戸倉を打つて四十二歳で殺された主しゅの仇を復ふくしたが、管領の細川家はそれから両派が打ちつ打たれつして、滅茶苦茶になった。

政元は魔法を修していた長い間に何もしなかつたのではない。ただ足利將軍の廃立をし

たり、諸方の戦をしたりしていた。今は政元の伝を筆にしたのではない。

政元より後に飯綱の法を修した人には面白い人がある。それは政元よりも遙はるかに立派な人である。

関白、内大臣、藤原氏のうじ長者、従一位、こういう人が飯綱の法を修したのである。

太政大臣公きみすけ相は外法のために生首なまくびを取られたが、この人は天文から文禄へかけての恐ろしい世に何の不幸にも遭わないで、無事に九十歳の長寿を得て、めでたく終ったのである。それは名高い関白兼かね実ざねの後の九条植通たねみち、玖山公きゅうざんこうといわれた人である。

植通公の若い時は天下乱麻の如くであつた。知行も絶え絶えで、如何に高貴の身分家柄でも生活さえ困難であつた。織田信長より前は、禁庭きんてい御所得はどの位であつたと思う。

或記あるによればおよそ三千石ほどだったというのである。如何に簡素清冷に御暮しになつたとて、三千石ではどうなるものでもない。ましてお公卿くげ様などは、それはそれは甚だ窘きんぱ乏うに陥っておられたものだろう。それでその頃は立派な家柄の人が、四方へ漂泊して、豪富の武家たちに身を寄せておられたことが、雑史ざつし野乗やしやうにややもすれば散見する。植通も泉州の堺、——これは富商のいた処である、あるいはまた西方諸国に流浪し、賀むこの十川そこう（十川一存かずまさの系だろうか）を見放つまいとして、搢紳しんしんの身ながらに笏しゃくや筆を攜おいて

弓箭鎗太刀を取って武勇の沙汰にも及んだということである。

この人が弟子の長頭丸に語った。自分は何事でも思立ったほどならば半途で止まずに、その極処まで究めようと心掛けた。自分は飯綱の法を修行したが、遂に成就したと思つたのは、何処に身を置いて寝ても、寝たところの屋の上に夜半頃になればきつと鴟が来て鳴いたし、また路を行けば行く前には必ず旋風が起つた。とこういうことを語つたという。鴟は天狗の化するものであるとされていたのである。前に挙げた僧正遍照も天狗の化した鴟を鉄網に籠めて焼いたのである。屋の上で鴟の鳴くのは飯綱の法成就の人に天狗が隨身伺候するのである意味だ。旋風の起るのも、目に見えぬ眷属が擁護して前駆するからの意味である。飯綱の神は飛狐に騎っている天狗である。

こういう恐ろしい飯綱成就の人であつた植通は、實際の世界においてもそれだけの事はあつた人である。

織田信長が今川を亡ぼし、佐木、浅井、朝倉をやりつけて、三好、松永の輩を料理し、上洛して、將軍を扶け、禁闕に参つた際は、天下皆鬼神の如くにこれを畏敬した。特に癩癖荒氣の大將というので、月卿雲客も怖れかつ諂諛して、あたかも古の木曾義仲の都入りに出逢つたようなさまであつた。それだのに植通はその信長に対して、立つたまま

に面とむかつて、「上総かづさ殿か、入洛じゅうらくめでたし」といったきりで帰ってしまった。上総殿とは信長がただこれ上総かづさ介であつたからである。上総介では強かろうが偉かろうが、位官の高い九条植通の前では、そのくらいに扱われたとて仕方のない談はなしだ。植通は位官をはずかしめず、かつは名門の威を立てたのである。信長の事だから、是かくの如き挨拶で扱われては大むくれにむかれて、「九条殿はおれに礼をいわせに來られた」と腹を立て、ぶつついたということである。信長の方では、天下を掃清そうせいしたのである、九条殿に礼をいわせる位の氣でいたろう。が、これはさすがに飯綱の法の成就している人だけに、植通の方が天狗様のように鼻が高かつた。公卿にも一人くらいはこういう毅然たる人があつて宜よろかつたのである。

木下秀吉が明智を亡ぼし、信長の後を襲ういで天下を処理した時の勢も万人の耳目を聳しやう動どうしたものであつた。秀吉は当時こういうことをいい出した。自分は天の冥加みょうがに叶つて今かく貴い身にはなつたが、氏も素性もないものである、草刈りが成上つたものであるから、古の鎌子いにしえかまこの大臣おんどの御名おんなを縁よすがにして藤原氏になりたいものだ。というのは関白になるうの下ごころだつた。すると秀吉のその時の素ばらしい威勢だつたから、宜しゅうござろう、いと易やすい事だというので、近衛このえりゆうざんこう竜山公がその取計とりはからいをしようとした。その時

にこの植通公が、「いや、いや、五摂家せつけに甲乙はないようなれど、氏の長者はわが家である、近衛殿の御儘おんままにはなるべきでない」と咎とがめた。異論のあるのに無理を通すようなことは秀吉は敢てあえせぬところである。しかも当時の博識で、人の尊む植通の言であつたから、秀吉は徳善院とくぜんいんげん玄以に命じて、九条近衛両家の議を大徳寺に聞かせた。両家は各固くその議を執つたが、植通の言の方が根柢があつて強かつた。そうするとさすがに秀吉だ、「さようにむずかしい藤原氏の蔓つるとなり葉となろうよりも、ただ新しく今までになき氏うじになろうまでじや」といった。そこで菊亭きくてい殿が姓氏録あたらたを検めて、はじめて豊臣秀吉となつた。

これも植通は宜よかつた。信長秀吉の鼻の頭をちよつと弾いたところ、お公卿様にもこういう人の一人ぐらいあつた方が慥たしかに好かつた。秀吉が藤原氏にならなかつたのも勿論好かつた。このところ両天狗大出来大出来。

秀吉は遂に関白になつた。ついで秀次ひでつぐも関白になつた。飯綱成就の植通は毎言つた。「関白になつて、神罰を受けように」と言つた。果して秀次関白が罪を得るに及んで、それに坐して近衛殿は九州の坊ぼうの津つへ流され、菊亭殿は信濃へ流され、その女むすめの一台いちだい殿は車にて渡された。恐ろしいことだ、飯綱成就の人の言葉には目に見えぬ権威があつた。

和歌は勿論堪能の人であつた。連歌はさまで心を入れたでもなからうが、それでも緒余しよよとしてその道を得ていた。法橋ほつきよう紹巴しやうぱは当時の連歌の大宗匠であつた。しかし長頭丸じやうくわが植通公を訪うた時、この頃何かの世間話があつたかと尋ねられたのに答えて、「聚落じゆらくの安芸あきの毛利殿もうりの亭ちんにて連歌の折、庭の紅梅につけて、梅の花神代かみよもきかぬ色香かな、と紹巴法橋がいたされたのを人褒め申す」と答えたのにつけて、神代もきかぬとの業平なりひらの歌は、竜田川たつたがわに水の紅くれなゐにくくすることは奇特不思議の多い神代にも聞かずと精を入れたのであるのに、珍らしからぬ梅を取出して神代も聞かぬというべきいわれはない。昔伊勢の国で冬咲の桜を見て夢庵むあんが、冬咲くは神代も聞かぬ桜かな、と作ったのは、伊勢であつたればこそで、かように本歌を取るが本意である、毛利大膳だいぜんが神主かみぬしではあるまいし、と笑つたということである。紹巴もこの人には敵かたわない。光秀は紹巴に「天あめが下さしる五月哉さつきかな」の「し」の字は「な」の字歟かといわれたが、紹巴はまたこの公には敵かたわない。毛利が神主にもあらばこそその一句は恐ろしい。

紹巴は時この公を訪うた。或時参つて、紹巴が「近頃何を御覧なされます」と問うた。すると、公は他に言葉もなく徐ろおもむに「源氏」とただ一言。紹巴がまた「めでたき歌書は何でござりましょうか」と問うた。答えは簡単だつた。「源氏」。それきりだつた。

また紹巴が「誰か参りて御閑居を御慰め申しまするぞ」と問うた。公の返事は実に好かつた。「源氏」。

三度が三度同じ返答で、紹巴は「ウヘー」と引退ひきさがつた。なるほどこの公の歩くさきには旋風つしかぜが立つてゐるばかりではなく、言葉の前にも旋風が立つていた。

源氏物語にも言辭事物げんじじぶつの注のほかに深き観念あるを説いて止観しかんの説という。この公の源語の注の孟津抄もうしんしょうは、法華經の釈に玄義、文句もんぐとありて扱さて、止観十卷のあるが如く、源氏についての止観の意にて説かれたということである。非常な源氏の愛読者で、「これを見れば延喜えんぎの御代みよに住む心地する」といって、明暮あけくれに源氏を見ていたというが、きまりきつた源氏を六十年もそのように見ていて倦うまなかつたところは、政元が二十年も飯綱修法を行じていたところと同じようでおもしろい。

長頭丸おしえが時おしえ教を請うた頃は、公は京の東福寺とうふくじの門前の乾亭院かんでいいんという藪の中の朽ちかけた坊に物寂ものさびた朝夕を送つていて、毎朝輪袈裟わげさを掛け、印を結び、行法怠らず、朝廷長久、天下太平、家門隆昌を祈つて、それから食事の後には、ただもう机おちにした、すつきりとした、塵雜じんざつの氣のない、平らな、落つた、空室に日の光が白く射したような生活のさまが思われて、飯綱も成就したろうが、自己も成就した人と見える。天文から

文祿の間の世に生きていて、しかも延喜の世に住んでいたところは、実に面白い。

或時長頭丸即ち貞徳ていとくが公を訪うた時、公は閑栖かんせいの韵事いんじであるが、和らかな日のさす庭に出て、唐松からまつの実生みばえを釣瓶つるべに手ずから植えていた。五葉ごようの松でもあればこそ、落葉松からまつの実生など、余り佳いものでもないが、それを釣瓶などに植えて、しかもその小さな実生のどうなるのを何時いつ賞美しようというのであろう。しかしここが面白いのである、出来た人でなければ出来ない真の樂みを取っているところである。貞徳は公より遙はるかに年下である。我身の若さ、公の清らに老い瘦枯やせがれたるさまの頼りなさ、それに実生の松の緑りもかすけき小ささ、わびきつたる釣瓶などを用いていらるはかなさ、それを思い、これを感じて、貞徳はおのずから優しい心を動かしたろう、どうぞこの松のせめて一、二尺になるまでも芽出度めでたくおわしませ、と「植ゑておく今日から松のみどりをも猶なほながらへて君ぞ見るべき」と祝いて申上げると、「日のもとに住みわびつゝも有りあふれば今日から松を植ゑてこそ見れ」と、ただ物をいうように公は答えた。

その器きその徳その才があるのでなければどうすることも出来ない乱世に生れ合せた人の、八十ごろの齡としで唐松の実生を植えているところ、日のもとの歌には墮涙だるいの音が聞える。飯綱修法成就の人でもまた好いではないか。

(昭和三年四月)

青空文庫情報

底本：「幻談・観面談 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1990（平成2）年11月16日第1刷発行

1994（平成6）年5月15日第6刷発行

底本の親本：「露伴全集 第十五巻」岩波書店

1952（昭和27）年5月刊

入力：土屋隆

校正：オーシャンズ3

2007年11月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魔法修行者

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>